月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.51



ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの舞台裏

ファルコムニュース

リィンの真剣勝負！
その相手は……？

英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～

神速！ 神速!! 神速!!!

みんな集まれ！ファルコム学園

発売日も決定!!
最新情報をチェック！

東京ザナドゥ

ついに気になる
ゲーム画面が到着！

暁の軌跡

マキアスとユーシスの
対立はついに……？

英雄伝説 閃の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

3 目次

4 ついに発売日が9月30日に決定!!
東京ザナドゥ

6 みんな集まれ! ファルコム学園
新久保だいすけ

15 英雄伝説 閃の軌跡
脚本：恵村まお　漫画：さがら梨々

40 英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～
著：草薙アキ　イラスト：YahaKo

82 ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの舞台裏

83 ファルコムニュース

東京ザナドゥ

発売日が9月30日に決定!!
そして新たな登場人物は天才ハッカー!?

毎号お伝えしてきている日本ファルコムの最新作『東京ザナドゥ』。今回はついにその発売日が決定した！　そして引き続きパーティーメンバーとなるキャラクターも登場！　さらには新たなバトルシステムの詳細も到着。余すところなくチェックしよう。

四宮 祐騎（シノミヤ・ユウキ）

16 歳（CV: ？？？）

IQ180超えの天才で、プログラミング技術とハッキング技術に長ける杜宮学園の1年生。16歳にしてアプリ開発や株取引等でかなりの大金を稼いでおり、 現在は市内にある高級マンションの一室で悠々自適な一人暮らし。完全に世の中を舐めきっている。学園にも高校の卒業資格を得るためだけに在籍しており、 単位取得に必要な最低限の日数しか出席していないため、ユウキの存在を知っている学生は殆どいない。《神様のいうとおり》というサイフォン用の占いアプリを開発し、 若者の間で人気アプリとして広まっていくのだが、それが原因で意外な事件へと発展していき……。

「“優秀”だって？
“天才”の間違いなんじゃないの」





●製品情報
- ●タイトル　：東京ザナドゥ
- ●発売日　：2015年9月30日発売予定
- ●ジャンル　：都市型神話アクションRPG
- ●対応機種　：PlayStation®Vita
- ●プレイ人数：1人
- ●販売価格　：未定
- ●CERO　：審査予定

『東京ザナドゥ』公式ホームページ
http://www.falcom.com/tokyo_xanadu/

ユウキの基本アクションもチェック！

柄の長い《槌》と本人の意志の下に自在なコントロールが可能な独立型ユニット《霊子殻》。2種類のソウルデヴァイスを操るユウキ。コウたちとはまた違った運用ができそうだ。

●通常攻撃



柄の長い槌状のソウルデヴァイスを思い切り振りまわしながら攻撃を繰り出す。そこそこのリーチ＆攻撃力はあるものの、槌が重いためスピードはかなり遅め。

●射撃スキル　《ラムダショット》



ユウキの意志で自在にコントロール可能な《霊子殻》というユニットから　エネルギー弾を発射するスキル。　手にしているソウルデヴァイスではなく、中空を浮遊する《霊子殻》から発射されるため、他のキャラと異なり、移動しながら射撃スキルを発動させることができる。

●剛撃スキル　《グラムインパクト》



槌の先端に《霊子殻》をジョイントさせ、衝撃力を高めた槌をそのまま地面目掛けて叩きつける豪快な剛撃スキル。通常の槌の攻撃力に加え、《霊子殻》のエネルギーも付加させてグリードに大打撃を与える。

●飛翔スキル　《イデアルアタック》



《霊子殻》がユウキの周囲をまわりながらバリアを展開。そのまま敵目掛けて突進していく飛翔スキル。尚、突進中バリアに触れた敵にはダメージを与える事ができる。

バトルシステムキャッチ

ゲージを溜めて一気に敵を撃破！
Xドライブ&X ストライク!!

今まで紹介してきた画面写真の中にも映っていたゲージやアイコンを使った新たなアクションシステムの詳細も判明。その名も「X（クロス）ドライブ」と「X（クロス）ストライク」。今回登場したユウキはもちろんのこと、コウたちの画面写真も入手しているので、追って紹介していこう。

■ Xドライブ

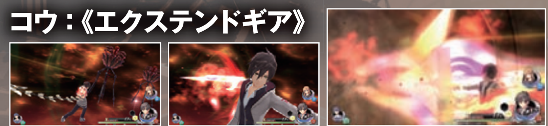


画面右下に表示されているドライブゲージが100%の時、方向キーの下ボタンを押すことでXドライブが発動。ゲージが100%から0%になるまでの間、移動スピード上昇、ダウン無効化など操作キャラとパートナーの能力が大幅にアップした状態で戦闘を行うことができるぞ。このゲージは通常攻撃やスキル攻撃を当てることで上昇させることができるので、ドンドン敵を攻撃していこう。

■Xストライク

画面右下に表示されているストライクポイント(六角形のアイコン)を消費することで発動可能なキャラクター固有の必殺技。こちらは通常攻撃やスキル攻撃でコンボ数を稼いでいくことで、溜めていくことができるとのことだ。

コウ：《エクステンドギア》



アンカーギアを鞭のようにしならせながら周囲の敵を切り刻んだ後、敵集団の懐に飛び込んで巨大化させたアンカーギアを前方の敵目掛けて打ち込むコウ最強の技。

アスカ:《クリミナルブランド》



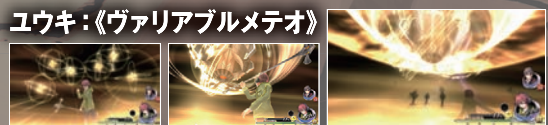
突進からの素早い連撃を繰り出した後、上空へと跳躍。そのまま敵目掛けてソウルデヴァイスを投げつけ、巨大なクリスタルの華を咲かせて大打撃を与える。

ソラ：《風塵虎吼掌》



超スピードによって生み出した分身で流れるような連打を繰り出した後、両手の間で気を練り込み、特大クラスのエネルギー弾をぶつけるソラ最大の奥義。

ユウキ：《ヴァリアブルメテオ》

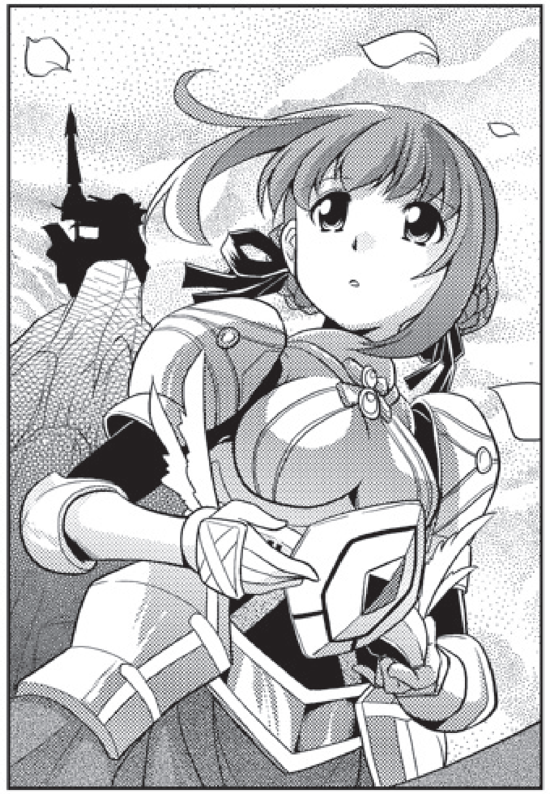


《霊子殻》を増殖させ、曲線的な動きで四方八方から敵を攻撃。その後、複数の霊子殻を融合させて巨大な一塊の霊子殻を生み出し、隕石のように敵の頭上にたたき落とす。

今月のキーワード！

ネメシス（Nemesis）

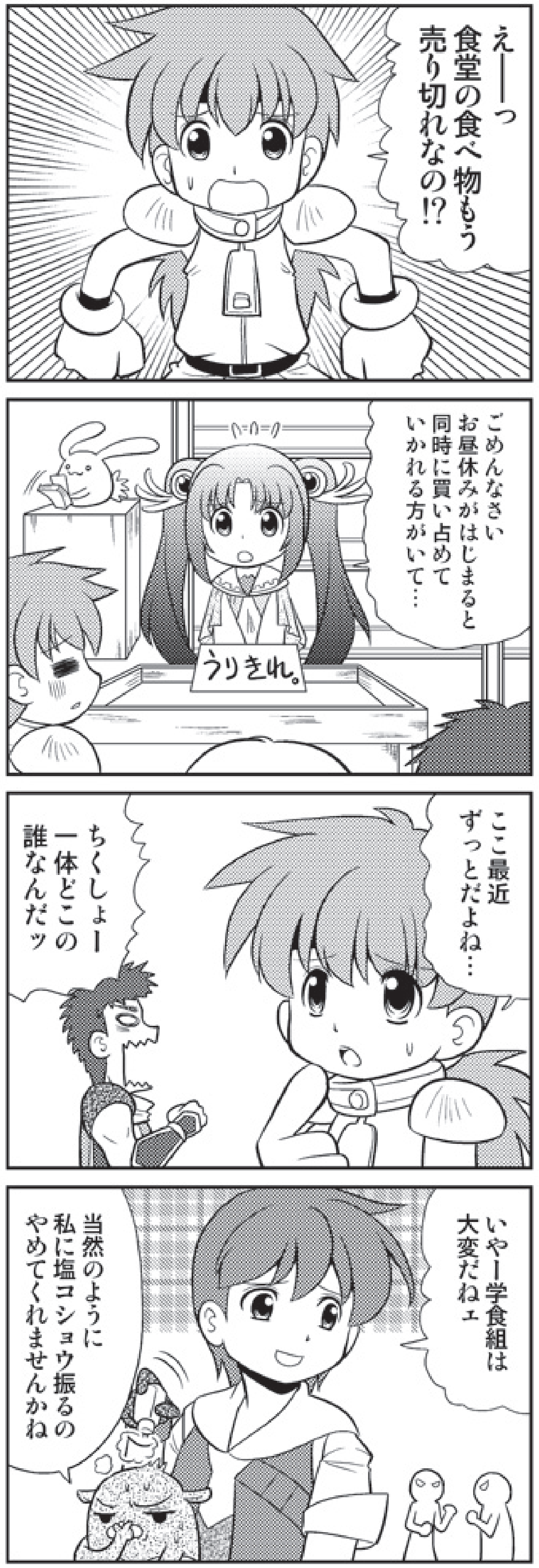
異能のエージェントを擁する謎の組織。「異界の管理」というスタンスで裏の世界で広く活動しており、在野の魔術師・霊能力者・呪具職人に幅広いネットワークを築いている。英国に第一本部、米国に第二本部があるとされているが実態は不明。異界への適性が見出された場合、希望があれば本格的な訓練が施され、ソウルデヴァイスの扱いや異界・怪異（グリード）の知識を学んだ後、エージェントとして全世界で活動することになる。



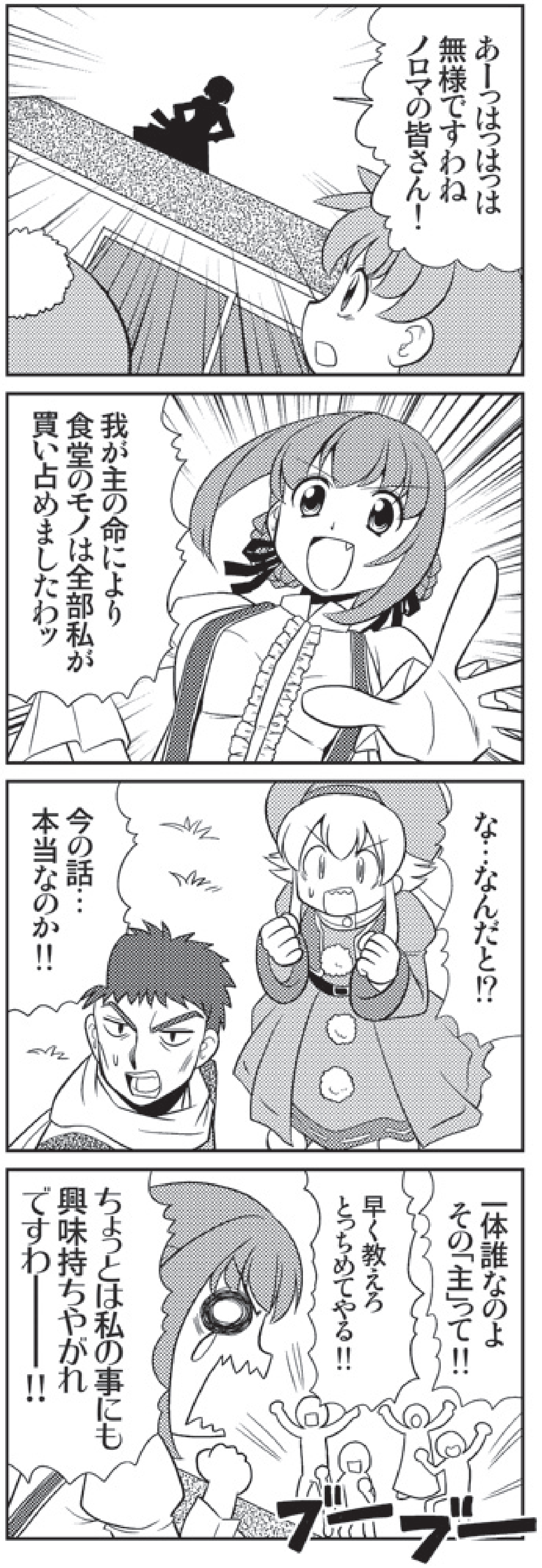
みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

消えた昼食



そいつの正体は



私のことか



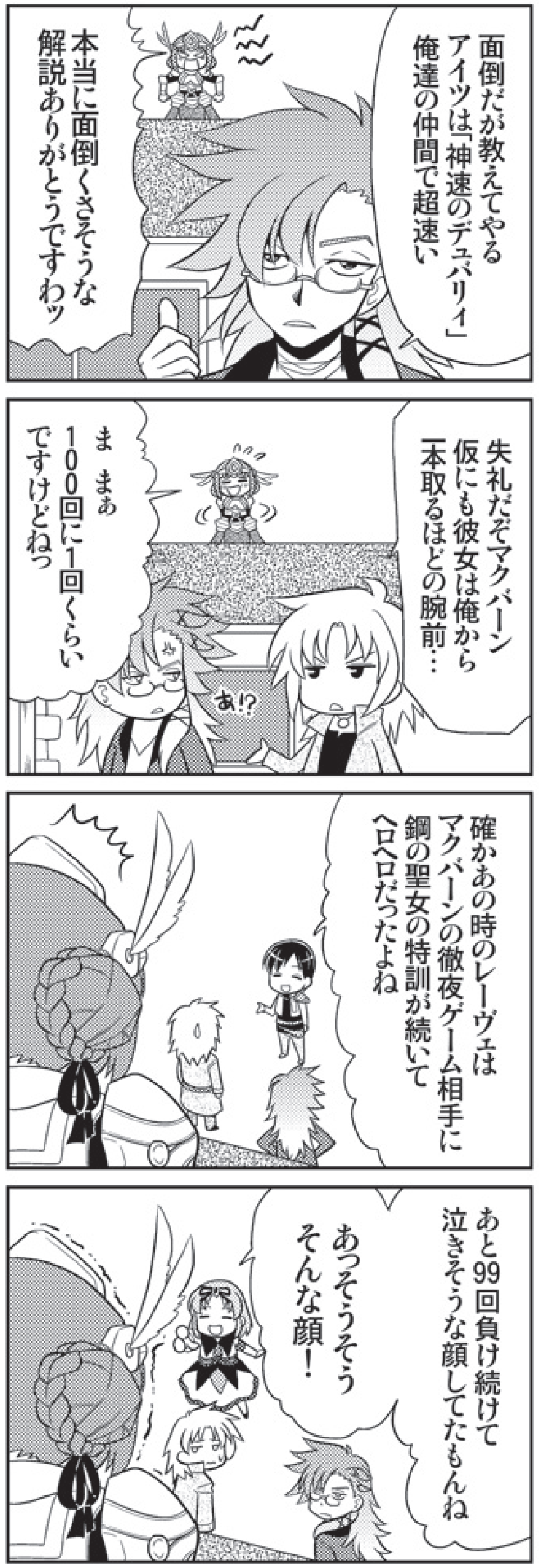
聖女の提案



デュバリィちゃん無双



1回の真相



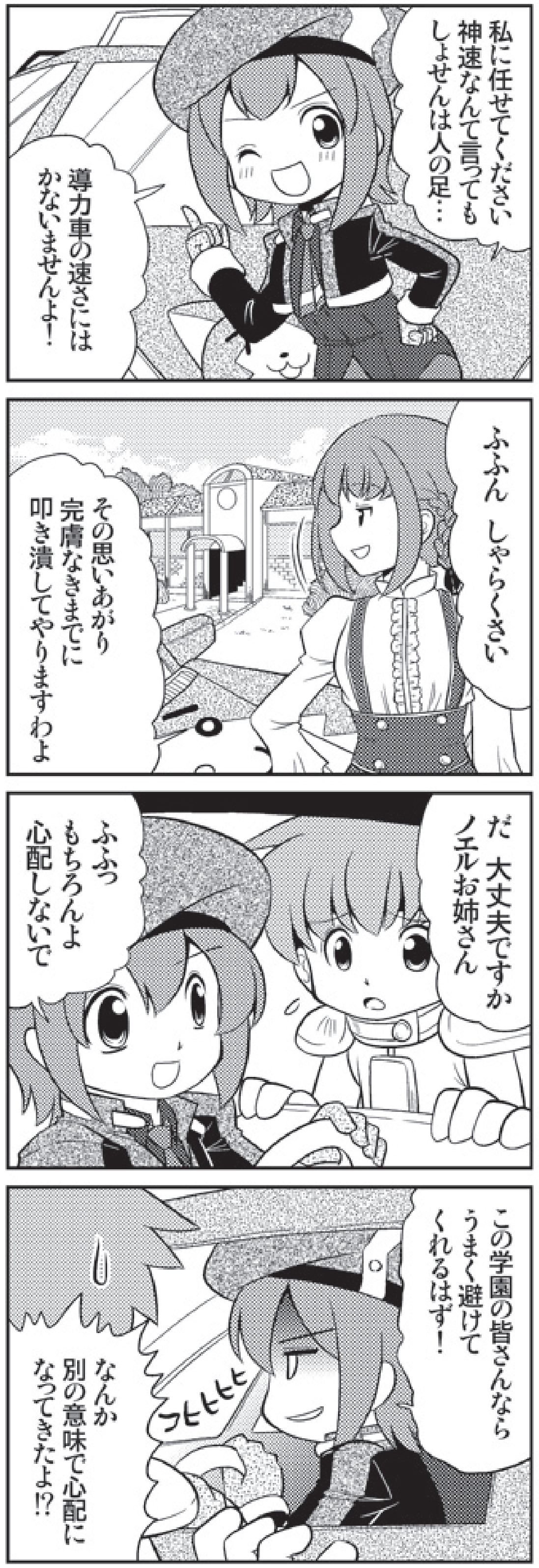
ノブレス パシリ



紫電の速さ



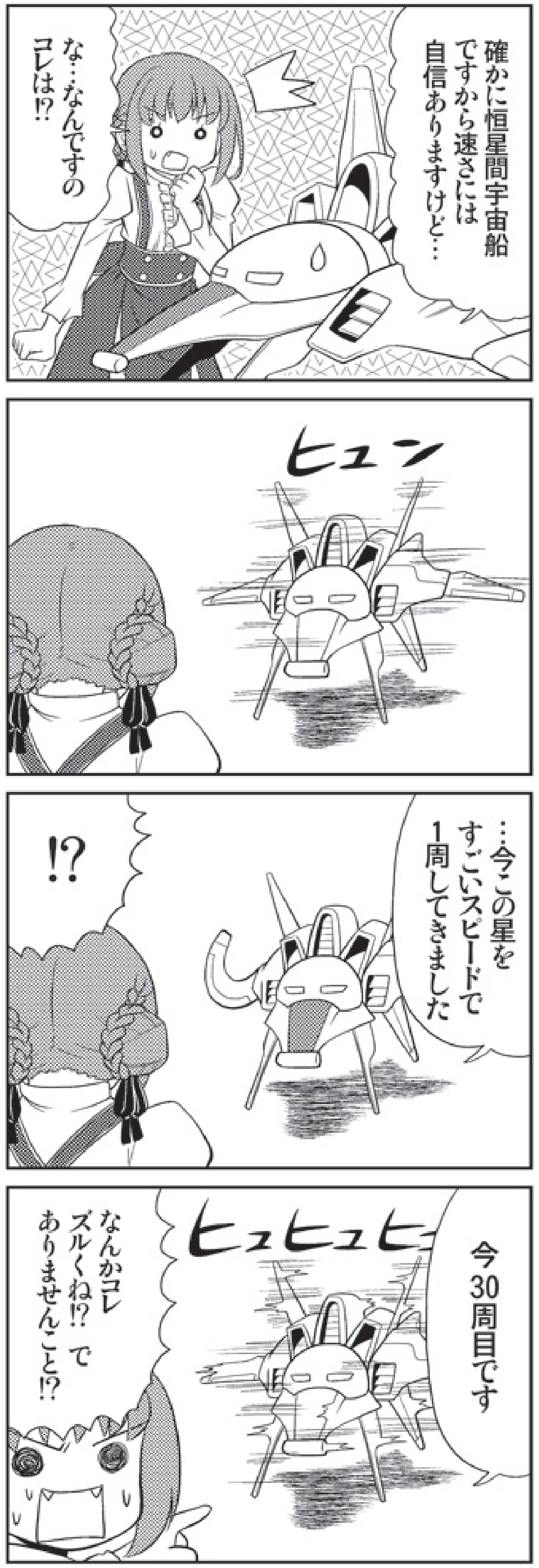
ノープロブレム



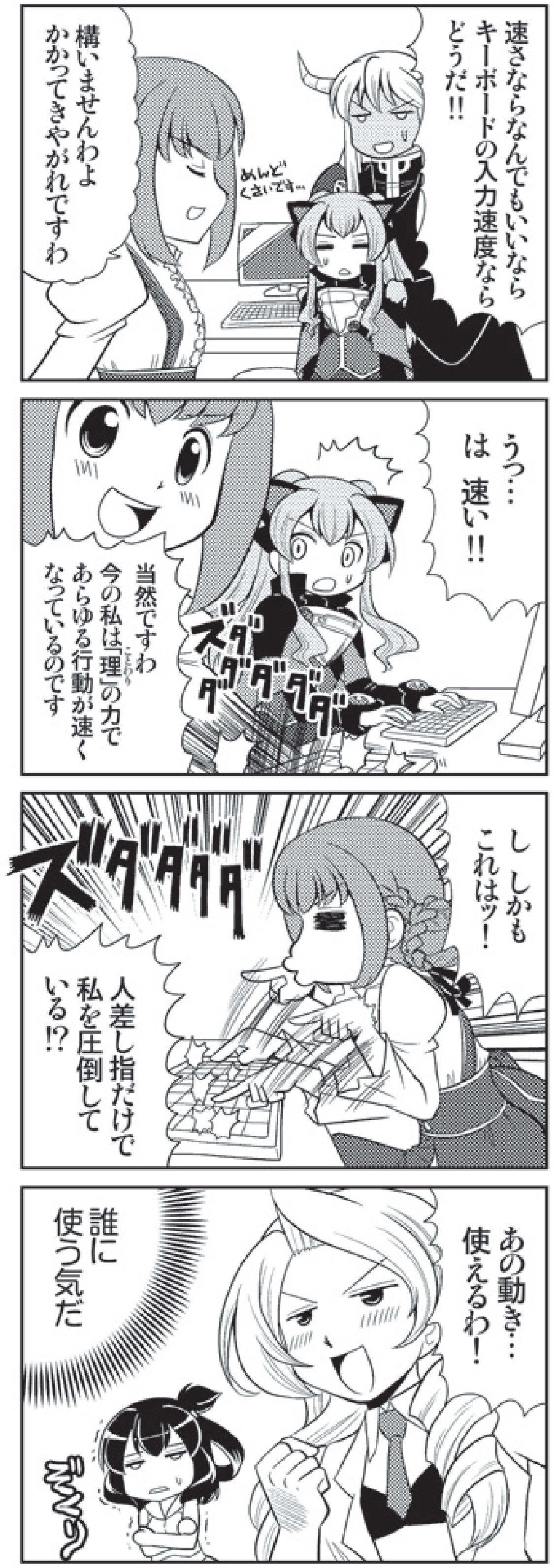
世界を渡るふね



星を渡るふね



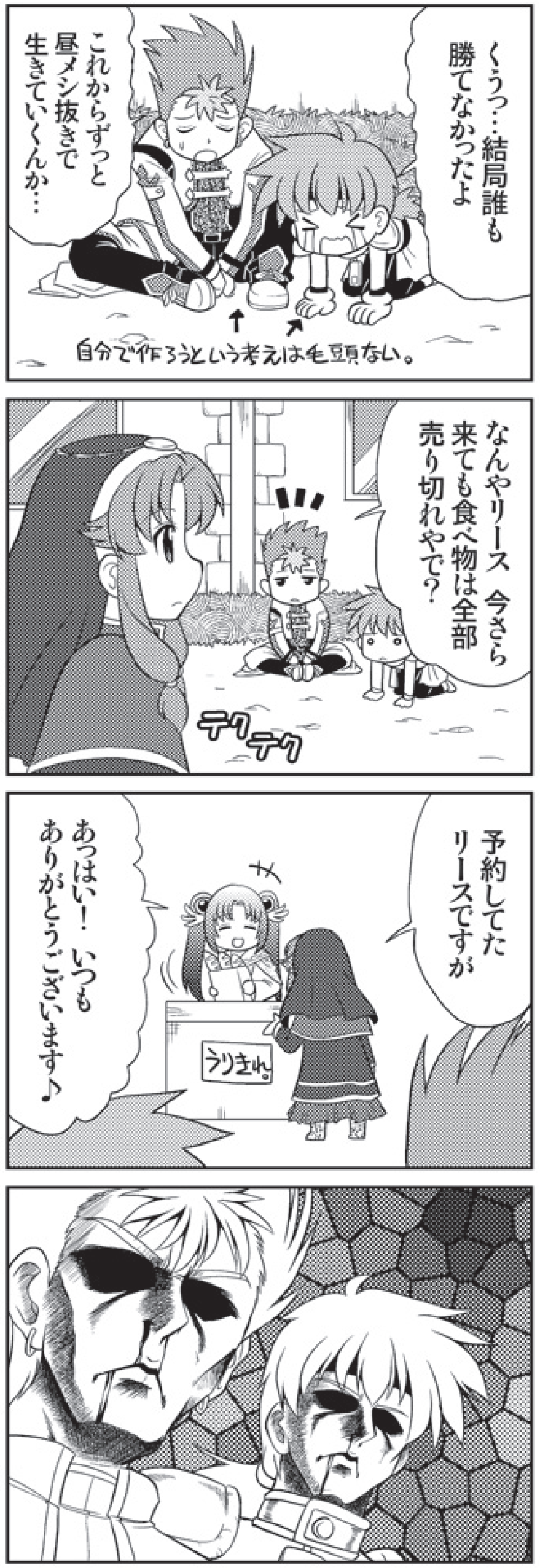
タイピング・オブ・ザ・○○○



速きことゲスのごとく



たったひとつの普通なやり方



それが俺の道




THE LEGEND OF HEROES
閃の軌跡
第7話
原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
脚本：恵村まお
漫画：さがら梨々
Artisan's Street
バリアハート 職人街
ガチャ
なんなんだあの男は！
これだから貴族というものは……！
落ち着けマキアス…
落ち着いていられるか！
今の依頼…なんであんな貴族にじゃまされなきゃならないんだ!?
せっかくの結婚指輪用に採ってきた半貴石を……
ん 食べるとは思わなかった
石を依頼してきたベントさん納得いってなさそうでしたね…
ああ 代わりにミラを受け取ったとは言っていたが…
そんなのはあの伯爵からの一方的な取引に違いないだろう!?
マキアスうるさい


FB ファルコムBOOKS
目指せ！ファルコム一番星!!
まさかのアニメ化!? 第2期決定!? ますます留まるところを知らない日本ファルコムオールスターギャグ四コマの最新刊がついに発売！ みんな集まれ一緒にゴーファイ!!
この面白さ、英雄級!?
既刊もよろしく!!
ファルコム学園 01 新久保だいすけ
ファルコム学園 02 新久保だいすけ
みんな集まれ！
ファルコム学園③
著者：新久保だいすけ
本体：850円＋（税）
ISBN:978-4-89610-836-1
好評発売中!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



「帝国で暮らす以上
伯爵クラスの貴族に
物申すことなど
できない」か……
依頼完了とはいえ
ちょっと後味の悪い
結果になってしまい
ましたね…
はぁぁあ…
ガチャッ
フフ
どんなドラマに
巡りあえるかと
見届けさせてもらったが
まるでくだらない
喜劇だったな
知り合いか?
だれ?
いや…
私の名は
ブルブラン男爵
カッ
絵画に彫刻といった美術品
そして美麗な細工の施された
様々な調度や工芸品の数々…
そ
そうですか…
で 俺たちに
何の用で…
およそ芸術と名の
つく物であれば
どんな物にでも
愛と情熱を傾ける…
ヤッ
自他共に
認める
好事家さ
あの宝飾店に
先ほどから
私も居てね…
君たちの活躍を
見させてもらったよ
ス…
店員に聞いたのだが
君たちは士官学院の
生徒で この街へは
実習で来ている
そうだね
人生とは思うようにいかないからこそ面白く
そして美しいもの
ばっ
それに苦悩し
もがき苦しむ
君たちは美しい…!
……
何のことですか



まぁ明日までの特別実習 せいぜい頑張って美しいものを見せてくれたまえ
カッ
カッ
さっ
それではまた会おう
カッ…
ぽかーん
……
な…っ
なんっっだあれは…!!?
フン 今の男――本当に爵位を持っているのやら
うるさい。
う～ん…どことなく芝居がかった感じがしましたね……
まるで「貴族」というものをわざとらしく演じているような
あぁ それとどうして俺たちの実習があと一日だと知ってるんだ?
実習の日数まではさきほどの店員には話していないはずだが…
フン あんな怪しい男の事を推測しても仕方ないだろう
手配魔獣の依頼に取り掛かるぞ
そうだな…
行きましょ フィーちゃん
まったく…
こんな時期にクロイツェン州が大幅増税なんて…
当主様はよほど俺たち…弱いものいじめがお好きなんだろうよ
オーロックス峡谷道


ドスン
あれだな…
強そうですね
よし ARCUSの《戦術リンク》でうまく連携を取っていこう
ああ…
行くぞ!!
やっ
崩れた! リィン!
隙あり!


はいっ 行きます!
よしっ 委員長頼む!!
ARCUS駆動――
!!
貴様…!? ここはアーツを発動させてから効率よくダメージを与えるべきだろう……!
なにぃ…?


よし…
そろそろトドメだ！
ジャキッ
どくがいい
なっ……!?
君というヤツは……!!
フン
のろまなのが
悪いのだろう
マキアスさんと
ユーシスさんの
連携が…
全然繋がって
ないね
戦術リンク
以前の問題
はぁ…
はぁ…
……
…ずいぶん
しぶとかったな
ええ…
でも何とか
なりました
……
チャキッ
どういうつもりだ…
ユーシス・
アルバレア……
どうして
僕の邪魔をする…!
戦術リンクが
保てない
じゃないか…!
こちらの台詞だ……
マキアス・
レーグニッツ……
ばっ
ガッ
戦術リンクの断絶……
明らかに貴様の側
からだろうが！
あ…!


!!
協力すると言いながら
結局腹の底では
平民を馬鹿にする
それが貴族の考え方
なんだろう！
阿呆が……！
その決め付けと
視野の狭さこそが
すべての原因だと
なぜ気づかない…！
ギリッ
っ……
よせ
ふたりとも…！
お落ち着いて
ください！
グルル…
うるさい
君たちには
関係ない！
ハッ
この際 どちらが
上か徹底的に
思い知らせて
やろう！
ふ…
ばっ
ふたりとも！
あぶないっ!!


どくんっ
!?
な なんだ
急に…
ぐっ…
ふらっ
ゴルル…
な…!?
あ あいつ
まだ生きて…

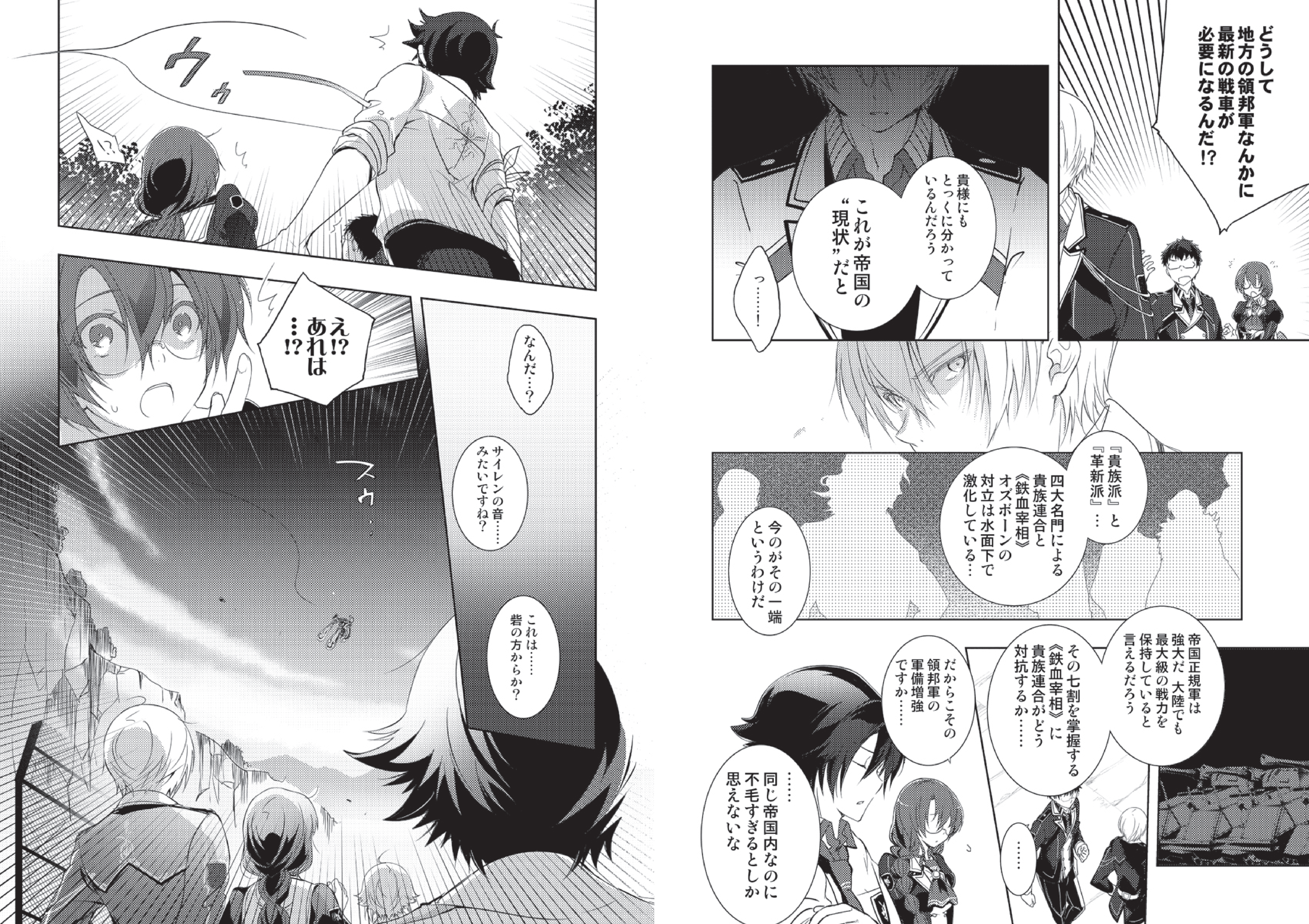

ザザーッ
とん
ドンッ
とどめ
っ……
やったか
リィンさん……!
は 早く
応急手当を…!
……


おおい…
大丈夫なのか……？
あはは…
大した傷じゃないさ まさか生きてたとは… 俺も甘かったよ
すまない その……
…完全に俺たちのせいだな
いや 気にしないでくれ 気づかなかったのは俺のミスでもあるし……
君は……
とにかくふたりに怪我がなくてよかったよ…
わたしも迂闊


ありがとう委員長 ——よし そろそろ出発しよう
今の魔獣 領邦軍の砦の兵士に報告する必要があるんだろう?
ああ…
くれぐれもやせ我慢をするな
ああ ありがとう
リィンさん
?
スッ…
？どうした？
いえ ちょっと……
ボッ
(陽光よ 彼を癒せ) …Lux solis medicuri eum.
ポウ…


え……
委員長 今のは…？
その包帯の様子を確かめただけで……
大丈夫そうですね！でもしばらくは動かさないでくださいね
あ ああ……
何か暖かいものが流れた気がしたけど……
そっ それにしてもフィーちゃんすごかったですね！
さっきの！
君 確か僕たちよりも二歳年下なんだよな？
そうだけど 別に慣れてるだけ
慣れてるって……
どんな環境で過ごしたらそんなのに慣れるんだ…？
スタ
スタ
クロイツェン州領邦軍拠点
オーロックス砦
こ これは……
凄いな……
《オーロックス砦》……帝国東部クロイツェン州の治安を守る『領邦軍』の拠点ですね
ベースは古い砦だけど大規模に改造されてるね
ユーシス？
……


…何でもない あそこの兵士に とっとと 魔獣のことを 報告するとしよう
ま…まさか ユーシス様が 魔獣を退治して くださったとは…！
うわぁ まさかのユーシスさまぁ
さすがです 助かりました！
…フン 領邦軍にまで 顔が利くと いうわけか
ゴトゴトゴト
ゴオオオオ
？ あれは…？
バリアハート からの 貨物列車…？
積荷は「戦車」か… それもかなりの 重戦車みたいだけど
RFが生産している 最新鋭の主力戦車……《アハツェン》だね
いやぁ ついに わが領邦軍にも 戦車が配備され 始めましてね！
おい あれは…？
やはり 装甲車と戦車では 段違いですし……
いつまでも 正規軍の連中に 大きな顔をさせて おけませんよ！
いずれは対空防御も 大幅に強化される 予定です！
我らが クロイツェン州の誇り… どうか楽しみに していただけると！
そうか… 用は済んだ バリアハートへ 戻るぞ
カツ
カツ
共和国と国境を 接している クロスベル方面 ならともかく……


どうして
地方の領邦軍なんかに
最新の戦車が
必要になるんだ!?
貴様にも
とっくに分かって
いるんだろう
これが帝国の
“現状”だと
っ……!
『貴族派』と
『革新派』…
四大名門による
貴族連合と
《鉄血宰相》
オズボーンの
対立は水面下で
激化している…
今のがその一端
というわけだ
帝国正規軍は
強大だ 大陸でも
最大級の戦力を
保持していると
言えるだろう
その七割を掌握する
《鉄血宰相》に
貴族連合がどう
対抗するか……
だからこその
領邦軍の
軍備増強
ですか……
……
……
同じ帝国内なのに
不毛すぎるとしか
思えないな
ウゥゥ
!?
え!?
あれは
…!?
なんだ…?
サイレンの音……
みたいですね?
スゥ…
これは……
砦の方からか?



FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



な…何か銀色のものが飛んでいったぞ…？
このあたりにはあんな鳥が飛んでいるのか!?
阿呆が……そんなわけあるか…！
今の…子どもが乗ってたな
ん
ええ!?
なんだ…？
あれは一体…？
《貴族派》と《革新派》の現実を目の当たりにした
リィン一行の前に突然現れた謎の飛翔体は……？

ゲームでは描かれなかった特務支援課の公式設定をもとに描かれたエピソード集！



英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

『軌跡』シリーズの第2弾『零／碧の軌跡』で主人公を務めたロイド、エリィ、ティオ、ランディら特務支援課メンバーの、ゲーム中では描かれることの無かったエピソードを一冊にまとめた外伝小説。ロイド、エリィの子ども時代の話や、ティオ、ランディがパーティーメンバーが離れていた間の出来事を垣間見ることができる！

好評発売中！

1,200円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:208
ISBN：978-4-89610-849-1
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

今度の『空の軌跡』小説はナイアル&ドロシーが主役！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

シリーズ累計200万本を突破した、日本ファルコムの大人気RPG『軌跡』シリーズ。その中でも特に人気の高い『空の軌跡』シリーズから外伝小説が登場！　リベール通信社のナイアル&ドロシーの記者コンビが、リベール国内の取材旅行中に出遭った人たちとの触れ合いを描いていく、心温まるハートフルストーリー4篇を収録。

好評発売中!!

1,200円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:296
ISBN：978-4-89610-846-0
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～

著：草薙アキ　イラスト：YahaKo



第3話 リィン vs. フェリス

多少のアクシデントがありつつも、なんとか着替えを済ませたリィン（外見はアリサ）とアリサ（外見はリィン）は、先端に網の付いた〝クロス〟と呼ばれるスティックを手に、フェリスの待つグラウンドへと赴く。

アリサが熱を注ぐ〝ラクロス〟とは、クロスを用い、直径六リジュ、重さ一五〇リムほどのゴム製ボールを奪い合って、相手のゴールにこれをシュートする競技である。

ゴールの大きさは、およそ一八〇リジュ四方の正方形であり、ゴール裏もエリアとして使用出来るのが特徴だ。

ポジションは、アタック、ディフェンス、ミディーなどがあり、ゴールを守る選手はゴーリーと呼ばれている。

また男女でルールや服装（防具）がかなり違うため、ほとんど別の競技であると言っても過言ではないだろう。

細かなルールについては割愛するが、基本的に身体への接触はファウルであり、相手のクロスに自分のクロスを当てたりして、パスやシュートを阻害する。

道すがら、「意外と覚えることが多いんだな……」と頭を悩ませるリィンだったが、「難しく考えずに、とにかくボールをゴールに入れればいいわ」とアリサに言われ、少しだけ気が楽になっていた。

グラウンドにはすでに対戦相手であるフェリスの他、上級生で同じラクロス部の副部長を務めるテレジアと、同じく上級生で部長を務めるエミリーの姿があった。

なお、ヴィンセントの妹であるフェリスは言わずもがな、テレジアは貴族で、エミリーは平民の生徒である。

身分の違いや性格の不一致などもあり、一年の頃はあまり仲がよくなかった二人であるが、今は〝親友〟と言ってもいいほどの友情で結ばれている。

お淑やかで利発なテレジアが〝静〟、熱いハートで運動神経抜群のエミリーが〝動〟と言えば分かりやすいだろう。

「お、来たわね」

そう快活に笑うのはエミリーだ。

「遅くなってすみません」

「いえ、私たちも今来たところだから大丈夫よ」

テレジアの気遣いに内心感謝しつつ、リィンは不遜な表情で佇むフェリスへと視線を向ける。

フェリス・フロラルドは、先ほどマルガリータに追いかけられていた、ヴィンセント・フロラルドの妹であり、頭頂部で結ばれた真紅のリボンがトレードマークの少女だ。

「待っていましたわ、アリサ。わたくし、今日こそは絶対に負けませんわ！」

ずびっ、と指を差し、闘志を剥き出しにするフェリス。

フェリスに挑まれ、アリサはこのように度々彼女と実力を競い合っているのだが、今のところはいつも僅差でアリサの方が勝利を収めている。

一度や二度ならまだしも、さすがに何度も敗れていれば、諦めたくもなるであろう。

それでもフェリスが心折れずに頑張り続けられるのは、やはり〝アリサ〟という好敵手に出逢えたからに他ならない。

もちろん出会った当初からこのような間柄になれたわけではないし、お互いが歩み寄る過程で、リィンが手を貸したこともあった。

テレジアとエミリー同様、様々な軋轢を経たことで、今こうして二人は、互いを高め合える良きライバルとなることが出来たのだ。

が。

「――ええ、もちろんよ。私も負けるつもりはないわ」

「「……えっ？」」

場を静寂が包む。

フェリスの勢いに釣られ、アリサ（見た目はリィン）が返答してしまったからだ。

（お、おい、アリサ⁉）

「あっ……」

リィンに小声で突っ込まれ、アリサは事態を把握する。

しかし時すでに遅し。

フェリスは胡乱な瞳をアリサにぶつけてきた。

「……どうしてあなたがやる気を出しているんですの？」

「い、いや、なんかこう鬼気迫る雰囲気だったから……」

「では先ほどのおかしな口調は？」

「え、えっと……それはその……アリサの気持ちになったと言うか……」

「そ、そうそう！　フェリスの〝絶対に負けない〟っていう強い気持ちに圧倒されて、俺……じゃなく、リィンも思わず私の気持ちになったんだ！　いえ、なってしまったのよ！」

「？？？」



　眉根を寄せ、怪訝な表情を浮かべるフェリスだったが、ふいに「まあいいですわ」と話を流してくれたため、なんとか事無きを得ることが出来た。

（あ、危なかったわ……）

（ああ……。お互い気を抜くと地が出る可能性があるから、注意しないとな……）

（ええ……）

〝応援〟という形で、エリア外から見守ることにしたアリサの前で、ついに試合が開始されようとしていた。

　さすがに個人で出来るスポーツではないため、二対二のチーム戦で、オフェンス側はボールを取られたら負け、ディフェンス側はシュートを決められたら負けという限定ルールだ。

　一点ずつの交代制で、五戦して三勝した方が勝ちである。

　協議の結果、アリサことリィンのチームメイトはテレジアで、フェリスの方はエミリーという形になった。

　戦力バランス的なこともあるが、奇しくも似たような性格同士でチームを組むことになってしまったのは、果たして偶然か。

　ともあれ、先攻はフェリスだ。

「では行きますわよ！」

　エミリーと目配せし、ボールを網――ポケットに入れて駆ける。

リィンもこれを止めるため、フェリスの前に立ちはだかった。

（確か身体の接触は厳禁、クロスで妨害するのはありだったな）

ならば、とリィンはクロスを上段に構え、フェリスのクロスを狙う。

が。

「甘いですわ！」

「なっ⁉」

フェリスは器用に右へ左へクロスを振り、リィンの攻めをすり抜けるように回避した。

遠心力を利用してボールをキープする、〝クレードル〟と呼ばれる技術だ。

相手に妨害させないようにするためでもあるが、クレードルの目的はもう一つある。

「先輩！」

「ナイスパス！」

そう、パスモーションへの繋ぎだ。

「しまった⁉」

リィンがそれに気づいた時、ボールはすでにエミリーの手へと渡っていた。

「おっと」

「行かせないわよ、エミリー」

だがリィンも一人ではない。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

チームメイトのテレジアがエミリーと対峙し、これを止めにかかる。

「くっ……」

リィンがボールを取り戻そうと走る中、フェイントを加えながら、テレジアを抜こうとするエミリー。

しかしそこはエミリーの親友たるテレジア――エミリーの癖を知っていると見え、これに対処し続けていた。

「なかなかやるわね」

「当然よ。伊達に一緒に居るわけではないわ」

「そうね――でもっ！」

「――っ⁉」

どこか嬉しそうに笑い、エミリーが一瞬の隙を突いてボールをパス。

狙いはテレジアの斜め後ろに回り込んでいたフェリスだ。

本来はそれをさせないため、リィンがフェリスをマークするのだが、ラクロス初心者の彼はボールを追いかけることにばかり意識が向き、これを怠ってしまった。

「ああっ⁉」とリィン。

「頂きですわ！」

パスを受け取ったフェリスがシュートし、誰も守っていないゴールのネットを揺らす。

「やりましたわ！」
「ナイスよ、フェリス！」
　フェリスとエミリーがハイタッチし、彼女らのチームに一点が加算される。
　いくら初心者とはいえ、リィンも武に勤しむ者だ。
　そのリィンをああも簡単に躱したのは、やはりこれが〝武術〟ではなく、〝スポーツ（運動競技）〟であるということが大きいのだろう。
　剣術ならば、相手を倒すことが目的である以上、攻守ともに鍔迫り合うことがあるが、ラクロスは先ほどのクレードルのように、クロス同士がぶつからない――つまりは鍔迫り合わないようにするのが基本だ。
　である以上、差が現れるのは当然――リィンの方が圧倒的に不利なのは明白だった。
　されど、不利なのは最初から分かっていたことだ。
　リィン自身、それに泣き言を言うつもりもないし、任された以上、全力で取り組む所存だ。
　点を取られはしたが、今ので大体の感覚は掴めた。
　次は先ほどよりも食いつけるはずだ。
　決意新たに、リィンたちの攻撃が始まる。
「どうしたんですの？　いつもよりキレが悪いですわよ？」
　余裕を見せながら言うフェリスに、リィンも負けじと言い返す。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「フェリスの上達ぶりに少し驚いただけよ。でもここからが本番！」
　言って、リィンはフェリスを抜こうとする。
　が、フェリスも簡単には通してくれない。
　リィン本来の身体ならば、この程度のブロックなど造作もないのだが、それもアリサのか細い身体となると話は別だ。
　一応アリサ自身も鍛えてはいるのだが、それでもかなり厳しいと言っていい。
　となれば、隙を見てテレジアにパスを送るしかないだろう。
　リィンは見様見真似でクロスを左右に振り、クレードルを行う。
　実際にやってみて気づいたのだが、重要なのはトップ――シャフトの上の方よりも、むしろボトム側の気がする。
　下の方に意識を向けた方が、自然に動かすことが出来たからだ。
「そこですわ！」
「うっ⁉」
　しかし所詮は付け焼き刃――途中でフェリスに遮られ、ボールが地面に落ちてしまう。
　すかさずフェリスが落ちたボールをすくい上げ――ゲームセット。
　フェリスたちのチームが二点目を上げた。
「くっ……」

（リィン……）

悔しそうに歯を噛み締めるリィンの様子を、アリサは祈る気持ちで見つめていた。

後一点取られれば、そこで試合終了だ。

信じて任せてくれたアリサのためにも、さすがに何も出来ないまま終わるわけにはいかない。

「大丈夫？」

「ええ、すみません。次は必ず防いでみせます！」

「分かったわ。一緒に頑張りましょう」

力強く頷き、リィンとテレジアはディフェンスに回る。

リィンの並々ならぬ気迫を感じ取ったのだろう。

二点リードと優位でありながら、フェリスたちもことさら真剣な表情になっていた。

「行きますわよ、アリサ！」

「――っ！」

ボールをポケットに入れ、フェリスが駆け出す。

リィンも彼女の一挙一動に目を凝らし、何が来ても対応出来るよう精神を集中させる。

挑発するようにクロスを突き出せば、フェリスは右へ左へ巧みに躱し、リィンの隙を窺っていた。

だが今回のリィンは一味違う。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

〝負けられない〟という強い気持ちが、リィンの技量を格段に向上させていたのだ。

「さすがはアリサ、全然隙が見当たりませんわ」

「当然よ。こっちはもう一点たりとも落とせないのだから」

「そうですわね。――けれどっ！」

「――っ⁉」

膠着をよしとせず、一か八かでフェリスはパスを送る。

隙を突いた形ではなかったが、それでもボールはリィンの右脇腹横をすり抜けていく。

弾道の先では、テレジアを躱したエミリーが待っていた。

が。

「させるかっ！」

咆え、リィンは咄嗟に左回りで身体を捻り、上半身のバネと跳躍、そして刺突が如く繰り出したクロスを以て、フェリスの放ったボールを追った。

「――うぐっ⁉」

ずざざ、と砂ぼこりを巻き上げながら、リィンは頭から飛び込むように地面へと倒れ込む。

「アリサ⁉」

フェリスたちが心配そうに駆け寄る中、リィンはゆっくりと上体を起こし、手にしていたクロスの先を見せつけるように差し出した。

「……これで一点、よね？」
そう、リィンの反応速度が見事にボールを捉えていたのだ。
「まったく、あなたという人は……」
口元を緩ませながら、フェリスはリィンに手を貸す。
「ありがとう、フェリス」
フェリスの手を握り、立ち上がったリィンは、ぽんぽんっと服に付いた砂を払う。
上手く滑り込んだと見え、砂汚れの他に外傷はないようだった。
「今のディフェンスは凄かったわ。練習の成果が出ているようね」
「ありがとうございます、先輩」
称賛してくれたエミリーに頭を下げ、リィンは再びフェリスと向き合った。
「次は私の攻撃ね」
「ええ。でも絶対に通しませんわ」
「それは私も同じよ」
互いに睨み合い、スタート地点に立つ両者と、それを微笑ましそうに眺めながら、同じくポジションにつくエミリーとテレジア。
「――行くわよ！」
リィンが地を蹴れば、すかさずフェリスが立ちはだかった。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「今日こそはあなたに勝ちますわ！　この日のために、わたくしは血の滲むような猛特訓をしてきたのですから！」
「……っ」
ずきっ、とリィンの心が痛んだ。
本当ならば、その思いをアリサ本人にぶつけて欲しかったからだ。
当のアリサもリィンと同じ気持ちなのだろう。
どこか悲痛そうな面持ちで、試合の行く末を見守っていた。
だがフェリスの思いは、決して無駄にはしない。
中身はリィンであるが、それでも全身全霊を以て相手を務めさせてもらうつもりだ。
リィンの全力。
それが発揮されるのは、やはり八葉一刀流を使用した際のこと。
ならばリィンが取るべき選択は一つだ。
アリサの身体である上、太刀を所持しているわけでもない。
かと言って、〝無手〟を主とする八の型を使うわけにもいかない。
武器はこのクロスなのだ。
ルールに則り、クロスを用いてゴールにボールを叩き込む――それ以外の行動は出来ない。
パスを出すには、フェリスのディフェンスを抜かなければならないが、現段階でそれはかな

り難しい。

テレジアの実力を疑っているわけではないが、絶対に点を取らなければならない状況である以上、確実性の高い戦力で行かなければならないだろう。

となれば――〝これ〟しかない！

（八葉一刀流――……）

「……アリサ？」

重心を深く落とし、ボールをポケットに乗せたまま、クロスを右手のみで持ち、左手は触れるか触れないかのラインを保つ。

身体の右半身をフェリスに向けるように体勢を整え、リィンはキッとフェリスを――いや、その先のゴールを睥睨した。

「え、ちょ、ちょっと⁉」

リィンの思惑に気づいたのだろう。

アリサの戸惑う声が聞こえた。

が、リィンの目はすでにゴールを捉えており――止まるはずもなかった。

「――てやっ！」

かっと目を見開き、リィンの抜刀――もとい〝抜棒〟が炸裂する。

所詮は真似事であるが、クロスはアリサに合わせて用意されたものであり、今のリィンが扱

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

う最適の装備でもあった。

ゆえに、真似事の領域を出ない抜刀術でありながらも、体捌きによって速度は向上し、一瞬の間にフェリスの横を通過したボールは、エミリーとテレジアさえをも置き去りにし、大気を貫きながら一直線にゴールを穿った。

「「「……はっ？」」」

文字通り唖然とする三人。

エリア外で「やっちゃった……」と頭を抱えるアリサのことなどつゆ知らず、リィンは「よし！」とやり遂げた男の顔をしていた。

「な、なななんですの⁉　今のは一体なんなんですの⁉」

が、当然、フェリスからすれば納得がいくはずもない。

今にも掴みかかってきそうな勢いで、リィンに詰め寄ってきた。

「これで二点目だな」

しかしリィンは爽やかにそう告げる。

「いえ、二点目とかそういう問題ではなくて！」

「うん？　何かおかしかったか？」

不思議そうに小首を傾げるリィン。

リィンからすれば、ただ持てうる限りの力を出し切り、シュートを決めただけである。

ルールを破ったわけでもないし、別段何かを言われるような覚えはまったくなかったのだ。

「誤魔化さないでください！　今のでたらめなシュートがおかしくないわけないですわ！」

「ああ、あれは体捌きでクロスを加速させて、一気に振り抜いただけだよ」

「そ、そんなのまるで剣術みたいじゃないですの!?」

「いや、一応剣術なんだが……」

「えっ？」

「えっ？」

と。

「――ち、違うんだ！　今のは違うんだよ、フェリス！」

「えっ……？」

リィンたちの間に漂う不穏な空気をかき消すかのように、アリサが矢の如く飛び込んでくる。

途中、アリサにぎろりと睨まれ、「うっ!?」とリィンは気圧された。

「聞いてくれ、フェリス。今のはなんでもないんだ。剣術を修めている俺からすれば、今のはただの真似事と言うか、ただ力任せに振り抜いただけというか……。とにかく偶然の産物なんだ。気にすることは何もない」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

アリサの話を聞いているうちに、リィンも地が出ていたことに気づいたと思われ、「しまった……」と表情を曇らせていた。

「いえ、気にするなと言われましても……って、どうしてあなたが弁解しているんですの？」

「あ、いや……。ほ、ほら、やっぱり第三者の視点というか、客観的な意見というのは大事だと思うからな。フェリスも納得出来ていないみたいだったし、どういう状況だったのかをきちんと説明した方がいいと思ってさ」

「まあそれはありがたいですけれど……」

「そ、そうだろう？　で、今のを結論付けると、アリサが状況を打開しようと、一か八か力任せに振ったものが、偶然ゴールに決まった――ただそれだけのことだから、何もおかしいことはない。じゃあ残り一セットも頑張ってくれ。はい、始め！」

ぱんっ、と無理矢理会話を終了させ、硬い笑顔で両手を叩くアリサに、「なんか怪しいですわ……」と心底胡散臭そうな視線を向けつつも、フェリスはオフェンスのポジションに向かう。

それを確認したアリサは、ほっと胸を撫で下ろし、再びエリア外へと移動する。

中程で申し訳なさそうな表情のリィンと目が合い、アリサは「とにかく頑張って」という意味合いを込め、頷いた。

「――よしっ」

アリサの思いを無駄にしないため、リィンは気合いを入れ直す。

少々危ない場面もあったが、二点目が入ったのは事実。

次を守りきれば、リィンたちの勝利である。

なんとしてでもボールを奪わなければ。

そうリィンが勢い込んでいた時だ。

「……おや?」

ぽつらぽつらと水滴が宙空より滴り、リィンは空を見上げた。

朝から雲の量が多いとは思っていたが、いつの間にやら空の青は一片もなくなり、灰色の雲が一面を覆っていた。

試合も残り一セットである。

小雨ならば続行しようと考えていたエミリーだったが、雨足は次第に強さを増し始め、ごろごろと雷のような音も響き始める。

「こりゃ今日はここまでかしらね」

「そうみたいね。残念だけど、これ以上は危険だし、試合はまた後日やり直すということで、今日はここまでにしましょう」

部長と副部長がそう言うのならば仕方がない。

フェリスも「仕方ありませんわ」としぶしぶ後片付けを始めた。

アリサも後片付けを手伝い、皆が更衣室のあるギムナジウムへと辿り着いた頃には、外は土砂降りで、一同も皆ずぶ濡れだった。

「まったく災難だったわ……」とエミリー。

「そうね。ここまで激しくなるとは、正直、思わなかったわ。あなたたちも早くシャワーを浴びた方がいいわよ。そのままだと身体にも毒だしね」

「ええ、分かりましたわ」「はい、分かりました」

更衣室内のシャワー室に向かうエミリーとテレジアを見送った後、フェリスはこちらを向いて言う。

「残念ですが、今回は引き分けのようですわね」

「ええ、そうみたいね。でもいい勝負だったわ」

「ふふ、わたくしもそう思います。でも次は絶対に負けませんわ」

「ええ、私も同じ気持ちよ。また正々堂々戦いましょう、フェリス」

「当然ですわ。だってわたくしとあなたはライバルであり、その……お友達、なのですから……」

恥ずかしそうにぷいっとそっぽを向くフェリスに、リィンは「ええ」と大きく頷いた。

リィンの後ろにいたアリサも、微笑みながら彼らのやり取りを眺めている。

「で、ではそろそろシャワーに行きましょうか。このままですと風邪を引いてしまいますわ」

「そうね。行きましょう、フェリス」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「ええ」

頷き、歩き始めたフェリスに続き、リィンもアリサに「じゃあまた後で」と残して歩を進める。

アリサも「ああ、分かった」と男子更衣室に向かおうとするが、

「――って、そうじゃないでしょ⁉」

「ぐえっ⁉」

どたばたと大股で駆けてきたアリサに首根っこを掴まれ、リィン（見た目はアリサ）の喉から、女子にあるまじき声が出てしまった。

「あら？　どうしたんですの？」

「あ、いや、ちょっとアリサに伝え忘れたことがあってな。少し時間がかかるかもしれないから、悪いが先に行っててくれるか？」

「まあそういうことでしたら……」

更衣室内に消えていくフェリスを笑顔で見送り、周囲に人の気配がないことを確認したアリサは、もの凄い剣幕で捲し立てた。

「で、あなたは何を普通に女子更衣室へ向かおうとしているのよ⁉　着替えの時といい、わざとやってるの⁉」

「い、いや、それは誤解だ。俺は別にやましい気持ちなんて一切ないし、今のはたまたま流れ

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

でそうなってしまっただけで……」

「……本当に？　実は私の身体になれてラッキーとか思ってるんじゃないでしょうね？」

自身の身体を抱き、アリサは半眼をぶつけてくる。

リィンは「参ったな……」と頭を掻きながら、真摯に弁解した。

「確かに俺も年頃の男だし、アリサが疑いたくなる気持ちも分かる。だが俺は故意にアリサを傷つけるようなことは絶対にしない。それは信じてくれ」

「――」

リィンに真顔でそう言われたアリサは、一瞬呆けた表情を見せたものの、〝アリサを傷つけるようなことは絶対にしない〟というリィンの言葉と表情を思い出し、ぽっと頬を桜色に染めた。

「そ、そう……。それはその……ありがとう……」

俯き、身体をもじもじとさせるアリサに、リィンは力強い口調で「ああ」と頷く。

すると、アリサはリィンに背を向け、胸元に手をあてながら、静かに二、三度深呼吸した。

「？」

リィンが小首を傾げる中、再度こちらを振り向いたアリサの顔色からは、幾分か赤みが薄らいでいた。

どうやら落ち着きを取り戻したようだ。

「それからその……私も言いすぎたわ。ごめんなさい、疑おうと思ったわけではないの……」
「いや、謝らないでくれ。誤解させてしまったのは俺の責任だ。だから……くしゅんっ」
「……あら？」
　言葉の途中でくしゃみが出てしまい、リィンは鼻を啜りながら苦笑した。
「すまない、どうやら早いところシャワーを浴びた方がよさそうだ」
　どこか間の抜けたリィンの姿に、アリサの表情も和らぐ。
「ふふ、そうみたいね。ならとりあえず寮に戻りましょう。さすがにそろそろシャロンも戻ってきていると思うし」
「そうだな。じゃあ行こう」
「ええ」

　一縷の希望を胸に、寮へと戻った二人だったが、
「シャロン……。あなたは一体どこへ行ったのよ……」
　寮内にシャロンの姿はなく、アリサは床に手をつき、絶望に打ちひしがれていた。
「……まあそのなんだ、あまり気を落とさないでくれ」
　リィンが慰めようとするが、アリサはちらりと泣きそうな顔で振り向いたかと思えば、
「はあ……」

　これみよがしに大きく嘆息した。
　アリサも年頃ゆえ、清潔感には人一倍気を使っている。
　汗も掻いてしまった以上、タオルで拭くだけでは我慢がならない。
　そもそも雨のせいでユニフォームどころか、下着の中まで濡れているのだ。
　どのみち一式を取り替えなければならないし、それならばやはりシャワーを浴びたい。
　かと言って、このままシャロンを待っていても、いつ帰ってくるか知れたものではない。
　その間にお互い風邪を引いてしまうだろう。
　頼みのシャロンがいない以上、着替え同様、目隠しでシャワーを浴びなければならないのか。
　いや、着替えはまだ下着があったが、シャワーとなると、お互い生まれたままの姿を晒すことになる。
「ふあぁ～……あぁ～……」
　声にならない声を出すアリサに、リィンもどうしてよいものかと頭を掻いていた。

　と――ばたんっ！

「――っ!?」
　突如けたたましく寮の扉が開かれ、リィンたちは何ごとかと振り返る。

そこに立っていたのは、ボーイッシュに揃えられたショートカットの、ライダースーツに身を包んだ一人の女生徒だった。

彼女は水に濡れた前髪をさっと掻き上げ、低めの声音で「話は聞かせてもらったよ」と不敵に言った。

「アンゼリカ先輩⁉」「アンゼリカさん⁉」

リィンたちが揃って声を上げる。

そう、リィンたちの前で腕を組み、佇んでいたのは、トワやクロウの同期であり、北部ノルティア州を治める四大名門の一角、ログナー侯爵家の息女――アンゼリカ・ログナーだったのだ。

アンゼリカ・ログナー。

常にライダースーツを身に付け、導力バイクを駆る自由奔放な麗人であり、東方の武術――《泰斗流》を我流にアレンジした武術の使い手でもある。

男嫌いというわけではないのだが、可愛い女の子が大好きで、学院内や地元にハーレムを多数形成しており、彼女のおかげで、多くの男子たちが寂しい思いをしているとかなんとか。

ちなみにルーレ出身ゆえ、アリサとは以前から交友があり、女の子の口説き方は、彼女の祖父である、グエン・ラインフォルトに習ったという話だ。

リィンたちがアンゼリカの登場シーンに既視感を覚える中、彼女はゆっくりと歩を進める。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「うーん、雨に濡れたアリサ君も可愛いね。でもそのままじゃ寒いだろう？　私が温めてあげよう」

「ちょ、ちょっとアンゼリカさん⁉」

腕を広げてリィンを抱き締めようとするアンゼリカを、アリサが必死に止める。

「む、そういえば、こちらはリィン君だったね。まあ見た目はアリサ君だし、気にすることはないよ」

「私が気にするんです！」

ムキになるアリサに、さすがのアンゼリカも「はは、すまない」と冗談だったことを告げる。

「だが助っ人に来たというのは本当さ。女の私になら、アリサ君も安心して身を任せられるだろう？」

「え、えっと……」

素直に頷けない辺りが、〝アンゼリカ〟という女性を物語っていたりもするのだが、当の本人はどこ吹く風だった。

「フッ、恥ずかしがり屋な子猫ちゃんだ」

無駄に爽やかな笑みのアンゼリカに、リィンたちもどう反応していいか迷う。

好意で提案してくれているのかもしれないが、クロウ同様、下心があるようにも思えるのだ。

だがその間にも、濡れた衣服が身体の熱を奪っていく。

決断は早めに下さなければならないだろう。
アンゼリカはリィンたちの事情を知っている上、今は割と切羽詰まった状況である。
ならば彼女も空気を読み、本当に助っ人に来てくれたのかもしれない。
日頃の行いを知るアリサからすれば、いまいち信用出来ないところではあったが、それでも女の子に対しては、真剣に思いをぶつけるアンゼリカだ。
「……」
こくり、と一人頷き、アリサは覚悟を決める。
が。
「何、心配することはないさ。今はリィン君なんだ。少しくらい私が見たり触ったりしたところで、アリサ君には痛くも痒くも……って、おや？　どうして私の背中を押すんだい？　ふふ、もしかして妬いているのかな？　大丈夫。私が真に愛しているのは、もちろん本来のアリサ君自身であって――」
――ぱたんっ。
アンゼリカを外に放り出し、そのまま扉を閉めたアリサは、何ごともなかったかのような笑顔で、「じゃあシャワーを浴びましょうか」と歩き始めた。
「あ、ああ……」
だがリィンは気づいていた。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

アリサの笑顔は、笑顔なのに笑顔ではなかったということを。
今は何も言わない方がいい――そう直感したリィンは、「まったく、クロウもアンゼリカさんも……」と恨み節を呟くアリサを静かに見送り、その背中が階段の奥に消えたことを確認した後、扉を少しだけ開け、未だに佇んでいたアンゼリカに頭を下げた。
「あの、なんかすみません……」
「いや、構わないよ。というより、今のは私のせいだからね。君が謝る必要はないさ。しかしあの怒りようを見る限り、本当に入れ替わってしまったみたいだね」
「ええ、面目ないのですが……」
「ふむ。ところで、他人の身体というのは、一体どんな感じなんだい？」
問われ、リィンはしばし考えてから答える。
「なんというか、新鮮な感じです」
「と言うと？」
「ええ。俺の知らないアリサの世界と言えばいいのでしょうか。とにかくリィン・シュバルツァーとして接しているだけでは、一生知ることの出来なかったであろう、新鮮な刺激を受けています。もちろんアリサだけではなく、俺自身の一挙一動とかも含めて」
「なるほどね。ならばまんざら悪い経験だけというわけではないようだ」
「そうですね。サラ教官も言っていたのですが、こうやって入れ替わったことには、なんらか

の意味が必ずあるから、その経験を大事にしろと」

「そうだね。私もそう思うよ」

そう微笑んだ後、アンゼリカは「ところで」と続けた。

「せっかく女の子になったんだ。女の子にしか経験出来ないようなことを、この私がじっくりと教えて――」

――ぱたんっ。

アリサ同様、リィンも扉を閉め、話題を強制終了させる。

〝女の子にしか経験出来ないようなこと〟に興味がないと言えば嘘になるが、それはアリサへの裏切りに他ならない。

もちろん冗談であろうが、身体を預かる以上、冗談でも乗るわけにはいかない。

扉を閉められてしまったアンゼリカは、「やれやれ、一日に二度も同じ女の子に振られてしまうとはね」と残念そうに言い残した後、導力バイクに跨り、何処かへと去っていった。

「アンゼリカ先輩も相変わらずだな……」

苦笑しつつ、リィンも着替えを取りに行こうとすると、入れ替わるようにアリサが自身の着替えを持ち、階段を下りてきた。

「あら？ 待たせちゃったかしら？」

「いや、すまない。実はアンゼリカ先輩を見送っていたんだ」

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

「……そう。まあアンゼリカさんも気を使ってくれたのだとは思うのだけれど……」

気まずそうに視線を逸らすアリサに、リィンも「ああ、そうだな」と頷く。

「だから別段気にしていた様子もなかったし、アリサもあまり気にしない方がいいと思うぞ」

「ありがとう。そう言ってくれると助かるわ。でも一応アンゼリカさんには、今度会った時に一言謝っておかないと」

「分かった。アリサがそうしたいなら、俺は構わないと思う」

「ええ」

話が一段落したところで、リィンも着替えを取りに行き、二人は浴室へと向かう。

こうなった以上、もう覚悟を決めるしかない。

まずはリィンの頭をタオルで巻いた後、がっしりと目隠しをして、二人はまず先ほどと同じように、衣服を脱がせ合うことにした。

もっとも、リィンはアリサ自身が好きに脱がせて構わないと言ったので、実質リィンことアリサの身体の着替えのみを、二人で行うことになったのだが。

「うーん、へばり付いてなかなか脱げないわね……」

「そうだな。俺がもう少し身体を捻れば……」

「あ、いい感じよ。そのまま腕を通して……っと」

上着を脱がすことに成功したアリサは、次いでスカートのファスナーを下ろし、インナーに

手をかける。
が、これがぴったりと貼り付いているため、脱がそうとすると、下着まで下がってしまった。
「うーん、どうしましょう……」
「そうだな、なら俺が下着を押さえて」
「そ、それはダメッ！」
唐突に声を張り上げられ、リィンは身体をびくつかせながら、「わ、分かった……」と了承した。
こういう男女の気遣う細かな箇所も、入れ替わってみなければ分からなかったことだ。
これも経験だと理解し、リィンはアリサの言うことに従う。
すると。
「……仕方ないわ。こうなったらもうこのまま同時に脱がせましょう。その前に上を外しておけば、リィンの方は終わりだもの。後は私が脱いで、さっさと洗って出ればいいだけ。そう、それだけのことよ」
自分を納得させるように言い、アリサはブラのホックに手をかける。
「おっ？」
胸元の息苦しさがなくなり、リィンの腕をするりとブラが抜けていく。
一度決めてしまえば早いもので、下も同様にさっと脱がされた。

「これでOKね。脱いだ衣服はまとめて隅に置いておくとして、後は私も脱ぐから、リィンは先に浴室に入っていて」
「ああ、分かった。えっと、確かここに扉が……」
両手を前に出しながら、辿々しく歩くリィンの後ろで、アリサも制服を脱ぎ始める。
上着、シャツと脱ぎ、ズボンから下着へと繋ぐ。
さすがに下着を脱ぐ時は、一瞬躊躇したが、それでも意を決してこれを取り去った。
今目隠しを取れば、そこには全裸のリィンがいる。
それを考えただけで頭が沸騰しそうになったアリサだったが、大仰に頭を振り、その考えを払拭させる。
今大事なのは、早々に身体を洗い、そして早々に着替え直すことなのだから。
「〜〜っ⁉」
とはいえ、同年代の男の子と一緒にシャワーを浴びようとしているのだ。
考えるなと言う方が無理である。
努めて冷静な態度を装うが、アリサの顔は真っ赤で、鼓動も爆発的なビートを刻んでいた。
先に浴室に入っていたリィンは、お湯の温度を調節していたようだ。
「このくらいか。洗い方はどうする？」
「そ、そうね、とりあえず石鹸を付けて、なるべく泡で洗うようにしましょう。それなら手が

触れないし、それなりに衛生的だと思うし……」
「ああ、分かった。じゃあまず石鹸を取って……」
「ひゃうっ⁉　ちょ、ちょっとリィン⁉　頭が太ももに当たってるわ！」
「す、すまん、石鹸がどこにあるのか分からなくて……」
「な、なら私が探すから、リィンはそこで大人しく座っていて！」
「わ、分かった」
　と。
「うっ⁉」
　びくっ、とリィンの肩が跳ねる。
　アリサの手が横腹に触れたのだ。
「あ、アリサ、あまりこっちに来ない方が……」
「え、なんですって？　——きゃうっ⁉　ちょ、ちょっとリィン⁉」
「ち、違う！　今のは不可抗力で……。その、あまり近づかない方がいいと思ったから……」
「そ、そうよね……。分かったわ……。——あ、これね。えっと、スポンジはここにあったから……」
　くしゅっ、とスポンジを揉めば、石鹸はあっという間に濃密な泡を拵えた。
「これでいいわ。じゃあまず背中から洗うから、リィンは後ろを向いて」

「ああ」
　アリサが撫でるように泡を乗せていけば、リィンの口からも気持ちよさそうな声が漏れた。
「いい感じだ。アリサは身体を洗うのが上手なんだな」
「そ、そうかしら？」
「ああ。しっかりと擦っているわけじゃないが、それでも身体の汚れが隅々まで落ちている気がする」
「ふふ、それはよかったわ。私の身体なんだし、身だしなみはきちんと整えないとね」
「そうだな。身体も大体泡に包まれたみたいだし、そろそろ流してもいいと思うぞ」
「分かったわ」
　ゆっくりとシャワーでお湯をかけ、リィンの肌に付いた泡を丁寧に落としていく。
　十分に流されたことを確認したリィンは、アリサからスポンジを受け取ろうとする。
「次は俺の番だな。スポンジをもらえるか？」
「ええ、これよ」
　——むにゅっ。
「あら？」
　アリサがスポンジを差し出せば、何やら弾力のあるものにぶつかった。
「あー、アリサ……」

リィンの気まずそうな声を聞き、アリサは思い出す。
以前にもこんなやり取りがあったということを。
「まさかとは思うけれど……」
「ああ、たぶん想像通りだと思う……。そこは――〝胸元〟だ」
「〜〜っ!?」
予想はしていたのだが、いざそうだと言われると、やはりショックは大きい。
アリサはかあっと顔を紅潮させ、「もう！　もう！　もう〜っ！」とスポンジをリィンに投げた後、唇をへの字に結びながら、くるりと後ろを向いてしまった。
「は、早く終わらせて！　これ以上このままだと、私が先に燃え尽きそうだわ！」
「わ、分かった。すぐに済ませるから、少しだけ我慢していてくれ」
感情の高ぶったアリサに言われるがまま、リィンはスポンジを片手に、細心の注意を払って背中を洗う。
勢いでここまで来てはいるが、やはり年頃の女の子であるアリサには、耐え難い羞恥であろう。
これ以上の負担をアリサにかけるわけにはいかない、とリィンも真剣に手を進める。
その甲斐あってか、それ以降は割とスムーズに事が運び、リィンの頭も洗い終え、残るはアリサの頭を洗うだけとなった。

英雄伝説 閃の軌跡
〜メンタルクロスリンク〜

早く終わらせてあげたいリィンとしては、そこまで汚れているわけでもないので、とりあえず乾かしておけばいいのではないだろうかと言ったのだが、アリサは律儀にも、「いいえ、せっかくここまで来たのだもの。きちんと洗っておきましょう」と譲らなかった。
申し訳ないと思いつつも、アリサがそう言ってくれるのならば、無下にするわけにもいかない。
アリサの意を汲みつつも、リィンは早々に終わらせるべく、椅子に腰かけるアリサの頭に、シャンプーを泡立てた。
「痒いところはないか?」
「えっと……あ、そこ。そうそう。あ、もう少し右」
「ここか?」
「ええ、そこよ。ああ、気持ちいいわ……」
「そりゃよかった」
微笑みつつ、これなら時間もかからないだろうと胸を撫で下ろすリィン。
「他に痒いところがなければ、そろそろ流そうと思うんだが?」
「ええ、いいわ。ありがとう、リィン」
「礼には及ばないさ」
用意しておいたシャワーのノズルを持ち、アリサの頭を流そうとするリィン。

これでなんとか終わったな……、と気を抜いた瞬間――ばたんっ！
「……えっ？」
浴室のドアが騒々しく開かれ、目隠し中ながらも、二人の目が点になった。
が、それよりも問題だったのは、

「……リィン兄様……っ。これは一体どういうことですか……っ？」

浴室に響いた声が、リィンたちのよく知る少女のものだったということだ。
「え、エリゼ⁉　どうしてここに⁉」
「え、エリゼですって⁉」
ばばっ、と揃って目隠しを外し、リィンたちは眼前で肩を震えさせる少女を見やる。
そこにいたのは、腰まで伸びた艶やかな黒髪に、真っ白なリボンを携えた、普段はお淑やかな雰囲気を持つであろう少女だった。
「せっかくアルフィン殿下から頂いたお菓子を、お届けしようと思っていたのに……っ」
見紛うはずもない。
リィンの義理の妹――エリゼ・シュバルツァーである。

エリゼ・シュバルツァー。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

帝都のサンクト地区にある、聖アストライア女学院に通うリィンの義妹であり、シュバルツァー男爵の実子。
清楚な佇まいの見目麗しい少女で、帝国の王位第二継承者であるアルフィン皇女の学友でもあり、お互い来年に控えた社交界デビューに向けて、教養を積んでいる。
なお、幼い頃はリィンにべったりだったが、彼が養子と知ると、途端に余所余所しい態度を取るようになったため、事情の知らないリィンは、それを少々寂しく思っていたりもする。
そんなエリゼが、今まさにリィンたちの目の前で、憤りに肩を震わせている。
これはまずい⁉　とリィンは早急に事情を説明することにした。
「ち、違うんだ、エリゼ⁉　これは誤解なんだ⁉」
「何が誤解だと言うのですか、アリサさん⁉　健全な学舎でこのように破廉恥な行為に及ぶなど――見損ないました！」
「だから違うのよ、エリゼさん！　私たちはそういう関係じゃないの！」
「そういう関係ではないって……ま、まさかお付き合いもせずにこのような行為を⁉　それにその口調はなんなのですか⁉」
「こ、これには深い事情があるんだ！　とにかく落ち着いてくれ、エリゼ！」
「無理です！　このような光景を見せられて、冷静でいられるはずがありません！」
「あなたの気持ちは分かるわ！　でもこれには事情があるの！　決してあなたの考えているよ

うな、不純なことではないわ！」

立ち上がり、必死の説得を試みるアリサだが、

「そ、そんなこと信じられ――って、きゃあっ⁉」

途端にエリゼは顔を両手で覆った。

見れば、彼女の顔は耳まで真っ赤になっていた。

「お願い！　聞いて、エリゼさん！」

アリサがエリゼの両肩をがっしりと掴むも、エリゼは「嫌っ⁉」と彼女の手を振り払った。

「そ、そんな格好でこちらに来ないでください！」

「えっ？」

顔を隠したまま後退るエリゼの言葉に、アリサは「そんな格好……？」と小首を傾げ、視線を自らの身体に移した。

「――っ⁉」

アリサの視線の先にあったもの――それはリィンの〝全裸〟であった。

一瞬にして顔から血の気が引いたアリサは、そのまま「はふぅ……」と気を失った。

「お、おい、アリサ⁉　――って、エリゼもどこへ行くんだ⁉」

「嫌ぁあああぁ～っ！　兄様の馬鹿ぁ～っ！」

泣きながら駆けていくエリゼを呼び止めようとするが、彼女はまったく聞き耳を持たず、寮



を飛び出してしまった。
　急いで追いかけようとするリィンだったが、失神しているアリサをこのままにしておくわけにもいかず、「ああ、もうどうすればいいんだ!?」と一人顔を伏せる。
　と。

「――あらあら、どうされましたか？」

　ひょこり、とドアの隙間から、シャロンが顔を覗かせた。
　グッドタイミングである。
　どうやらラインフォルト本社から帰ってきたようだ。
「シャロンさん!?　よかった！　助けてください！」
　救いの女神が現れた！　と藁にも縋る思いのリィンだったが、
「あらあら、これはこれは……」
　シャロンはいつもの微笑みで、リィンと気を失っているアリサを交互に見比べた後、
「私は何も見ておりませんので、後はお二人でごゆっくり――」
　ぱたんっ、とドアを閉めてしまった。
「いや、シャロンさん!?　ちょっと待ってください!?　あの、聞こえてますよね!?　お願いです、戻ってきてください！　シャロンさーん!?」
　リィンの悲痛な叫びが浴室に延々と響くが、ドアが再び開くことはなかったという。

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～



2011年10月から2015年4月10日まで配信されていた『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏。最終回です！

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第177回-第179回　後藤沙緒里（『閃の軌跡』エリゼ・シュバルツァー役）

突然の番組終了発表となった177-179回。その放送回を飾る最後のゲストは『閃の軌跡Ⅱ』ではパーティーキャラへと昇格した人気キャラクター・エリゼを演じられた後藤沙緒里さんとなった。可愛い女性には目がない小寺さんが、最後とばかりにいつも以上に暴走し、番組が成立するのか!?　という危機感の中、収録が進められていった。また人気コーナーのファルコムミュージックライブラリもラスト1回を残した179回に最終回を迎え、ガチくん、しおりんそれぞれの思い出深い曲を紹介するということに。

▶第177回-第179回の舞台裏◀

美女が来ることで、コテさんが暴走する姿はお馴染みになっていたが、今回はその集大成といってもいいほどの暴走を見せた。ちなみにスタッフから「後藤さんは小寺さんの好みにストライクなので、くれぐれも暴走しないように」というアドバイスを受けた上であの暴走であったという……。

第180回　なし（最終回）

日本ファルコム30周年を記念して生まれたこの「めんどくさいラジオ」も、ついに180回となる今回で最終回。今回は、そのラジオの歩みを水橋さん、小寺さん、特務支援課見習いのガチくん、しおりんの4人全員で、年表を使って振り返っていく形となった。いつから支援課見習いのキャラが濃くなっていったか、コテガキがいつ始まり、いつからいじられネタになったのかなど、懐かしいその歴史を追っていきつつ、たくさんのおたよりも紹介されていき、過去最大級のボリュームの最終回となった。

▶第180回の舞台裏◀

最終回の放送後はパーソナリティ・スタッフ全員参加の簡単な打ち上げが行われ、そこでも、このラジオの歴史を振り返りトークが繰り広げられた。そして全員がいつかの再会を近い、それぞれの帰路へ。さながら、『閃の軌跡Ⅱ』のエンディングを思い出す光景だった。

次号からは
『エステル&ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ』の舞台裏をお届け！　乞うご期待!!

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

DL版PCタイトル・ミュージック価格改定

お手頃価格で新たな冒険に!!



PCタイトル

アルバム



iTunes・moraなど各音楽配信サイトで販売中のファルコム音楽アルバムとDMM.com・DLsite.comなど各ダウンロードサイトで販売中のファルコムPC作品が一斉値下げ！　PCタイトルには『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd』など新規追加作品も（全てWindows8対応）。聴きたかったあの音楽、まだプレイしていないタイトルをこの機会に揃えてみるのはいかが？　お求めは各配信サイトまで。

英雄伝説 空の軌跡FC Evolution オリジナルサウンドトラック

生まれ変わった遊撃士の物語!

最新作『英雄伝説 空の軌跡FC Evolution』の劇中全使用曲が収録されたサウンドトラックがゲーム発売同日、6月11日に発売決定！　Evolution化に合わせて新たに録音・アレンジされた楽曲に加え、ボーナストラックとして新主題歌の「空の軌跡」がフルバージョンで収録されている。3,218円（税込）。ダウンロード版、ハイレゾ音源版は2,400円。



iOS/Android版『イースⅠクロニクルズ』

スマホから冒険に旅立とう!!

ファルコムが誇るA・RPG『イースⅠ・Ⅱクロニクルズ』をベースとしたスマホ版『イースⅠクロニクルズ』が配信開始！　タッチ操作対応などスマホでのプレイに最適化の他、PSP版で好評を博したグラフィック・BGMの切り替えなど様々な機能を搭載。いつでもどこでも「イース」を楽しもう！　DotEmuより配信→http://www.dotemu.com/en





THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

開発画面がついに到着!!

昨年の発表以来、オリジナルキャラクターのナハトとクロエや、クロスベルの遊撃士協会メンバーのイラストなどを発表してきたオンラインゲーム『暁の軌跡』。今回はついにそのゲームの開発画面が到着したぞ。『軌跡』の名を冠したオンラインストーリー RPG。その実態に迫る！

メニュー画面



様々な操作を行うことになるメニュー画面。クロスベル中央広場を背景に、市内の移動を行うボタン、パーティ編成、手帳の確認といった、軌跡シリーズおなじみの機能が並んでいる。画面中央には謎の飛行船（？）が描かれた[出航準備]というアイコンも……。

バトル画面



準遊撃士である主人公ナハトとクロエの活動拠点となるクロスベル自治州。その中心部、クロスベル市の地下に広がる施設《ジオフロント》での戦闘場面を公開。戦闘では新規デザインされたＳＤキャラクターが画面いっぱいに動き回る、「空の軌跡」や「零の軌跡」といった従来の軌跡シリーズのスタイルを踏襲。また、インターフェイスのテキストは「閃の軌跡」に近いスタイリッシュなデザインとなり、基本行動となる[アーツ]や[クラフト]の他、[交代]なども機能も搭載している。

アーツ、Sクラフト





従来の軌跡シリーズ作品同様、『暁の軌跡』でもアーツ、クラフト、Ｓクラフトといったお馴染みの要素を搭載。新規デザインキャラによる迫力のバトルシーンがブラウザゲーム上で体験できる。

●製品情報

■タイトル：	英雄伝説　暁の軌跡
■ジャンル：	オンラインストーリーＲＰＧ
■サービス開始時期：	2015年～
■運営：	USERJOY JAPAN株式会社
■開発：	UserJoy Technology

『英雄伝説 暁の軌跡』ティザーサイト http://akatuki.ujj.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

**アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！**

今月のプレゼントはこちら!!

これが最後のチャンス!!





① 1名様

❶『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』Ⅶ組メンバー集合サイン色紙

ここでしか手に入らない豪華キャスト集合色紙！眺めるも良し、額に入れて飾るも良し！



② 1名様

❷アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』キャスト集合サイン色紙

メンバーにはあの「北米版アドル」草尾毅さんのサインも！　コアなファンに自慢できちゃうかも!?

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.51　プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
　（記事一覧から1つずつ）
3：①
　②
　（はい・いいえ／作品名）
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：東京ザナドゥ 最新情報
2：英雄伝説 暁の軌跡 最新情報
3：みんな集まれ！ファルコム学園
4：漫画 英雄伝説 閃の軌跡
5：小説 英雄伝説 閃の軌跡
6：ティオのファルコムラジオめんどくさいです…
　でもがんばりますの舞台裏
7：ファルコムニュース

アンケート

①イベントなどでよく買うグッズは何ですか？
②『みんな集まれ！ファルコム学園』で好きなキャラは誰ですか？

特設サイトからも応募ができます!
http://www.field-y.co.jp/root/index.php/falmagap

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り　5月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.51

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち／石橋青大
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社